

英国言語学会 Diploma in Translation 受験報告

柴原 早苗

(BBC=英国放送協会 日本語部)

The following is a report on the Diploma in Translation, a qualifying examination administered by the Institute of Linguists in the U.K. The author took this exam in November 2000, and gives an account of this examination.

1. はじめに

2000年11月に英国の言語学会 (Institute of Linguists) が主催する翻訳試験を受験した。以下は試験内容、および受験報告である。

2. Institute of Linguists (IoL) について

IoL は英国の言語専門家団体であり、6700名以上の会員を擁する。創立は1910年で、ケント公が名誉会長を務めている。会員は5種類あり、上から順に Fellow, Member, Associate, Affiliate, Registered Student となっており、それぞれ入会基準が規定されている。いずれも入会審査を経た上で入会が許可される。会員には通訳者、翻訳者、言語学者、大学教授、学生などが多く、分科会や地方支部もある。また、機関誌 *The Linguist* を2ヶ月に1回発行するほか、図書館の運営やデータベースの管理、検定試験の実施などを行っている。検定試験は初心者から上級者までを対象に数種類あり、そのうちのひとつ Diploma in Translation (DipTrans) は翻訳試験としては英国で最難関である。

3. Diploma in Translation (DipTrans) とは

DipTrans は1989年から実施されている。英国では日本と違って検定試験の数そのものが少なく、通訳技能を問う検定試験はない。内容として一番近いのがこの DipTrans である。DipTrans は大学院修了レベルに相当し、プロの翻訳者と見なせる

SHIBAHARA Sanae, "A Report on the Diploma in Translation exam of the Institute of Linguists in the U.K." *Interpretation Studies*, No. 1, December 2001, pages 136-139.

(c) 2001 by the Japan Association for Interpretation Studies

かどうか問われる。試験の実施言語はおよそ 40 カ国語で、英国各地で受験が可能。2001 年度の場合、受験費用は総額 245 ポンドで、これに各試験センターの利用料が追加される。

3.1 受験資格

大学学部レベル相当を修了した者。

3.2 試験内容

試験は Paper 1 から Paper 3 までの 3 部からなり、いずれも翻訳力を問われるものである。受験者は基本的に英語から母語へ翻訳する（よって日本人の場合、英日）。内容は以下のとおりである。

- Paper 1: 2 時間。翻訳および注釈。課題文は一般的な内容で、およそ 600 ワード。翻訳上、問題となる点（言語学的、文化的背景の違いなど）を annotation（注釈）として 8~12 点、列記する。課題文は英国の新聞や雑誌などから出される。
- Paper 2: 2 時間。Technology, Business, Literature からひとつを選択。課題文は約 450 ワード。
- Paper 3: 2 時間。Science または Humanities のいずれかを選択。課題文は約 450 ワード。

Paper 2 および Paper 3 の課題文は *New Scientist*, *The Times*, *The Economist*, *The Spectator* といった英国の新聞雑誌記事のほか、ジョージ・オーウェル、オスカー・ワイルド、マイケル・クライトンなどの作品が出題されている。99 年からはペーパーごとの一部受験も可能となった。ただしその場合、まずは Paper 1 に合格しなければならない。なお、一部不合格の場合、不合格となったペーパーの再受験が可能。

当日は辞書、事典類の持ち込み可。回答は万年筆あるいはボールペンによる直筆か、もしくは自分のコンピュータとプリンタを持ち込んで提出することもできる。鉛筆は下書き以外、使用不可。なお、下書き用の用紙も試験終了時に回収される。

3.3 受験対策

筆者は 96 年から 99 年までの過去問題を取り寄せたほか、ロンドンのウェストミンスター大学で実施されていた受験対策コースを受講した。自力で過去問を解くだけでは客観的な視点が得られないため、対策コースに週 1 回出席したのは有意義であった。過去問は授業でも取り上げられたが、講師や他の受講生と意見交換することで、大変参考になった。

Paper 2 および Paper 3 は、原文をきちんと把握し、訳漏れがないよう気をつければ良いが、Paper 1 は注釈をつける必要があるため、一番気を遣ったと言っても良い。ただし、注釈自体、訳者の主観的な部分も入り込むので、必ずしも正解が決まってい

るものではない。IoL のガイドラインによると、注釈として認められるものは下記のとおりである（ただし、これが全てではない）。

- 長文、主節のない文、イディオム、話し言葉、ことわざ、曖昧な文。
- 繰り返し、筆者独自の文体、ユーモア、ほのめかし、技術用語。
- 辞書以外の意味、新語、外来語、団体名の省略、単位、通貨。
- 引用、タイプミス、意識の必要があるもの。

試験では翻訳者の観点から注釈を加える必要があり、翻訳者がどのような思考プロセスを経て母語に訳したかが問われる。採点用ガイドラインによると、「読み手はあくまでも *educated reader* とするべきなので、常識的なことを書いても点にはならない」とある。

なお、参考文献としては Peter Newark の *A Textbook in Translation* (Prentice Hall, 1988) が役立った。当日持参した辞書・事典類は下記のとおりである。

- ソニー電子辞書（『リーダーズ』『リーダーズ・プラス』『研究社和英中辞典』を収録）
- 『リーダーズ英和辞典』研究社
- 『リーダーズ・プラス』研究社
- 『プログレッシブ和英中辞典』小学館
- *Collins English Dictionary* (Millenium Edition)
- 『ワーズワード』同朋舎
- 『イミダス』集英社
- 『最新日米表現事典』小学館
- 『最新日米口語辞典』朝日出版社
- 『新明解国語辞典』三省堂
- 『類語国語辞典』角川書店

電子辞書用の予備電池は多数用意し、万が一故障したときのために紙版の辞書を多めに持参した。一方、時間配分にも配慮した。Paper 1 の場合、最初の 30 分を課題文読解と単語調べに費やし、その後 2 時間を翻訳作業に、そして最後の 30 分で見直した。Paper 2 と 3 では最初の 30 分を課題文読解と単語調べ、次の 1 時間で翻訳し、最後の 30 分を見直しに当てた。ちなみに Paper 1 から 3 までまとめて受験する場合は一日がかりの試験となるので、体力が必要である。

3.4 受験対策コース

語学学校などによっては DipTrans 向けの通学・通信コースを実施しているところもあるが、英日のコースは少なく、ロンドンでは University of Westminster の開講する通学コースが唯一のようだ。

3.5 過去問題

FS Print and Design という会社が一括管理（問い合わせ先は FS.print@virgin.net）。なお、IoL のホームページ (<http://www.iol.org.uk/>) から注文できる。

3.6 合格基準

採点側である IoL はプロとして見なせるような答案を求めている。正確さ、語彙の選択、句読点、数字などを正しく使いこなしているか、また、Paper 1 の場合、適切な箇所を注釈点として挙げているかが問われる。合格レベルは Distinction, Merit, Pass あるいは Fail の4つである。

3.7 合格後

合格後は IoL の Member に申し込むことができる。また、肩書きとして “DipTrans IoL” を使うことが許可される。また、筆者は DipTrans の合格を元に、オーストラリア NAATI (National Accreditation Authority for Translators and Interpreters) の “One-way Translator” に認定してもらった。

3.8 2002 年以降について

IoL によると、Paper 3 の選択肢が増え、今後は Paper 3D (Science)、Paper 3E (Social Science -- これは Humanities paper の代わりとなる)、Paper 3F (Legal) となるもようだ。また、試験日もこれまでの「11月受験、翌年3月合否通知」から「2003年1月受験（21～23日）、3月合否通知」となる。よって、11月受験は2001年が最後となる。これにより、出願の締め切りも変更される。

4. 終わりに

英語や翻訳・通訳に関するさまざまな検定が実施されている日本とは対照的に、英国では数えるほどしか検定試験がない。通訳・翻訳業を営む者にとって、検定の合否よりも実績が問われるのは日本も英国もさほど変わらないであろう。とはいえ、定期的に検定を受験することは自らの実力向上のためにも、また、自分の力を客観的にとらえる上でも必要なことだと筆者は考えている。DipTrans（英日）の受験者はまだ少ないので、日本からの受験者が今後増えることを期待したい。

著者紹介：柴原早苗 (SHIBAHARA Sanae) BBC (英国放送協会) 日本語部放送通訳者。現在、BBC ワールド TV にて放送通訳・映像翻訳に携わる。英国 Institute of Linguists および Institute of Translation and Interpreting 正会員。E-mail: <skonno@ma.kew.net>
